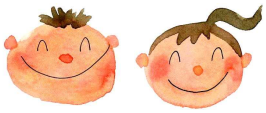
レシピ ＃003　　R3.6.28

ICT機器の活用から必然性のある話合いへ



〔伊達地区〕

高学年　理科の授業より

授業のワンシーン

「ものが溶ける」様子を観察する授業です。

子どもたちに見通しをもたせるために、結果を予想させてから取り組ませます。

はじめに、１ｍのアクリルパイプで「食塩の粒」の観察。

「わ～、すごい！」、「ゆらゆらが見えた！」、「途中で消えたよ…。」

子どもたちはつぶやきながら、食い入るように見ています。

次に、タブレット顕微鏡で「食塩の粒」「コーヒーシュガー」、「小麦粉」、「砂の粒」の観察。

子どもたちは、粒の大きさに注目しています。

「変わらないね。」、「いや、地味に変わったよ。」

「あ、今、す～っと消えたよ。一瞬だから注意して。」

子どもたちの目の輝きと追究意欲は止まりません。

ここがオススメ！

子どもたちは、実感をもって「ものが溶ける」とはどういうことかを理解していました。教師が「〇〇について話し合いましょう。」などと細かく指示を出さなくても、子どもたちは、タブレット顕微鏡で見えた事象や、そこから気付いたことなどを伝え合っていました。

発見したことを友達に伝えたい、一緒に共有したいという思いが、必然性のある話合いにつながっていったのではないでしょうか。

理科の得意な子どもが中心となって実験・観察をするのではなく、一人一人が主体的、対話的に学習に取り組み、学びを深めていました。

R3【県北版】学校教育指導の重点　P.8 P.10